

「笠戸丸」マルチメディア用ソフトウェア試作資料

宇佐美 昇 三

KASATO-MARU

Shozo USAMI

In June 1900, a passenger ship was launched at the Walker-dockyards owned by Wigham-Richardson Shipbuilders at Newcastle upon Tyne. The ship was named "Potosi" by Mrs. Tweedy, the wife of one the directors of WRS. The ship was 400 feet in length, 40 feet in beam and 21 feet in depth and 6000 gross tons upon completion. She had two triple expansion steam engines, each with three cylinders, and would run at 15 knots maximum speed. The owner was the Pacific Steam Navigation Company, one of the leading marine companies at that time. In August, a newspaper, the "Shields Gazette," reported that Potosi was sold to the Russian Voluntary Fleet for 100,000 pounds.

There were many additional modifications made to the Potosi, which was given a new name, the "Kazan" by the RVF before her trial voyage in September. Two weeks later, "Kazan" set sail from Newcastle for the Russian (now Ukrainian) port city of Odessa, the base of the RVF on the Black Sea. The RVF was a kind of auxiliary navy. Since the Dardanelles Channels International Treaty prohibited passage through of the channel by any naval vessels, Russia created the RVF. It consisted of 10-16 large, high-speed vessels which would operate as merchantmen during peace time, but once a war was declared, they could be armed in the Mediterranean by taking out guns from their hatches and converting the ships into cruisers.

Before the Russo-Japan War started, the RVF sent their vessels 40 times per year to the Orient because the Siberian Railroad was not yet completed. In order to complete the railroad, Russia needed a great amount of labor in Siberia. Many of the passengers on the ships to Siberia were criminals, but political prisoners and their families also engaged in labor. This paper is the first in a series devoted to the story of the amazing life of the "Kazan", later named the "Kasato-maru".

「笠戸丸」基礎年譜：本稿はCD-ROMやインターネットによるマルチメディア・ソフトの一環として試作した台本の一部である。実際にはこの基礎年表を背骨にして、ビデオ、写真、地図、記事により事件の解説、関連人物像、船舶の要目、軍事や海事の用語、移民史、植民地史の年表などにリンクし、20世紀前半の海からみた世界史を「笠戸丸」という船から眺望できる企画である。また、ユーザーが多様な資料を自由に付加し、削除することにより各人の笠戸丸史や自分史を作成できる。なお、本ソフトを構築するための各種の文献資料、設計図、写真、ビデオ記録はかなり集積済である。

「笠戸丸」の概要

この汽船は名前を「笠戸丸」という。1900年に完成し、1945年にその生涯を終えるまでに日露戦争をはじめ、太平洋戦争までさまざまな国際的な事件に遭遇する。旧名はロシアのカザン号、その前は英国のポトシ号であった。はじめは貨客船、そして義勇艦、運兵船、移民船、客船、病院船、鰯工船、蟹工船などを経て、大西洋、インド洋、神戸—基隆航路、中国、北洋を航海し、イギリス、ロシア、中国、インド、ブラジルなどの人々に存在を印象づけた。20世紀前半の世界史を背景に生きた船である。しかし、その船歴は多くの謎に包まれた船でもあった。ここにその失われた航海日記をいくつかの資料から再現し、その謎を解きあかす手がかりとする。謎と解釈については、一部注書きしたが、他は別稿に譲る。

1899年（明治32年）英国の貨物船ポトシ号として起工

2月17日：ニューキャッスルの名門造船所メッサーズ・ウィカム・リチャードソン造船会社（WR社）は英国のバシフィック・スチーム・ナビゲーション社（PSNC）の客船として「ポトシ号」を建造すると契約した：船価は85,000英ポンドである。実際の船価は95,000英ポンド以上になった。これより先：2月12日WR社はPSNC社から20,000ポンドを前払いで受領している。同時受注の同型船に「ガリシア号」があった。ポトシ号の引き渡し予定は1900年2月、ガリシア号が同年3月であったが、これらは大幅に遅延した。1899年9月1日タイン川左岸のネプチューン造船所の船台で建造番号362番のポトシ号（のちカザン号と改名し、さらに笠戸丸となる）が起工、11月23日に肋材取り付けを完了した。

（注）このころ山本英輔（のち海軍大将）など複数の日本海軍関係者がニューキャッスル地区で日本軍艦の建造を監督・見学中、原因不明の死亡事故、また乱闘事件に巻き込まれている。

1900年（明治33年）進水直後ロシア義勇艦カザン号になる

1月16日：WR社はポトシの第2次支払いの15,000ポンドを受領

5月10日：ポトシの船体が完成

5月19日：WR社はPSNCに工事遅延の説明書を送る。内容は不明

6月13日：ネプチューン船台で「ポトシ」とツウィディ社長夫人が正式に命名し進水式をあげる。社長の自宅ケスロハウスで祝賀会を開催する。

8月1日：WRはPSNCより第3次支払いの1,494ポンド10ペンス2シリングを受領。

11月29日：第4次支払い14ポンド9シリング10シリングを追加工事代受領。WRはポトシだけでPSNCから計95,209ポンドを受領。工事の内容は鋼鉄製の遮浪甲板の取り付け、バラストタンクの拡張改善、バルクヘッドの強化など総じて長期の荒天航海に備える設備である。

8月10日：WRは義勇艦隊カザン号と改名したポトシに改造工事を開始：内容は病室関係の充実：8月11日から21日間に試験航海実施。義勇艦隊とは平時は通商、戦時は仮装巡洋艦などに変身する補助海軍である。会社組織だが船長以下は現役・予備役の海軍士官が乗組んだ。義勇艦隊の英国駐在代表は厳格なリンデン・ロシア陸軍大佐で、従来ニューキャッスルのホーソン・レスリー社で多数の義勇艦を建造・監督していた。突然カザンを購入した理由は謎だが、米西戦争、北清事変、ボーア戦争による船荷の急増や、同型船があるので仮装軍艦として活用範囲が広いためとみられる。

8月7日：英国の新聞は「PSNCは試運転すみのポトシをロシア義勇艦隊に12—13万ポンドで売却」と報道（実際には109,000ポンドであった：PSNCは1.4万ポンドの利益をえる。）ちなみに当時の1円は2シリング2分の1ペンスである。ロシア義勇艦隊はカザンを約百万円で買った：同じ大きさの英国製「信濃丸」の購入費は98万円、国産「常陸丸」の建造費は86万円であった。

8月25日：「カザン」はニューキャッスルから15マイル北方のニュービギン町の沖合で試験航海。

8月28日：WR社はロシア義勇艦隊に改装費9,437ポンドを追加要求し30日に受領。

9月5日付け英国の新聞「ポトシが義勇艦カザンと改名され、30人の将校と2,000人の兵士を収容可能。カザンはタイン河河口左岸の北シールズのスミスポンツーンで出航前の塗装中」と報道。かつ、同日の新聞には乾ドックに入渠中の船名リストにカザン：新規：ウエスト・ハートルプールとある。

9月17日：カザンはニューキャッスルを出港し、(現ウクライナの)オデッサに向かう。航海距離は3,687海里である。

10月28日付け大阪朝日新聞「義勇艦隊がポトシを購入」と報道：その他、同時期の日本海軍の「水交社記事」や海事関係の雑誌も大同小異の記事を掲載して注目。

1901年（明治34年） ロシア義勇艦カザンは極東航路で長崎に寄港開始

2月7日：カザンがオデッサより長崎に入港。船長はスメルスキー：陸軍将兵1,970人を搭載。

2月8日：外国艦船12隻(うち病院船2隻)碇泊。日本の新聞によるとカザンは病院船とは認識されていない。

2月9日：カザンはウラジボストーク（以下ウラジボ）に向け長崎を出港。

2月25日：同船はウラジボより長崎に入港。

2月26日：同船、オデッサへ向けて長崎を出港。貨物・郵便物搭載：貨物取り扱い人はN. GRAY商会：オデッサ―旅順間の航海距離は9,147海里、片道約1万海里。11ノットで909時間、航海所要日数38日。

6月27日：カザンはオデッサより途中各地に寄港しつつ長崎に入港。

6月30日：カザンはウラジボへ向け出港。ウラジボへの移住者968人搭載。

7月17日：カザンはウラジボより長崎入港：同日カザンはオデッサへ向け出港：兵士は搭載せず。

1902年（明治35年）

当時の長崎はロシア太平洋艦隊の避寒地であった：3月4日付け東洋日の出新聞は「長崎港にはロシアの軍艦・汽船18隻が在泊中、さながらロシアの港」と報道している。日本人女性を「妻」にするロシア海軍軍人も少なくなかった。長崎市曙町には今もロシア人墓地がある。

4月8日朝：カザン、オデッサより長崎入港。

4月9日夕方：同船は長崎発、ウラジボへ：ロシア兵1,367人を搭載。

4月25日夕：同船ウラジボより長崎入港。

4月30日朝：同船長崎発、オデッサへ。

11月4日：カザンは大連より長崎入港。

11月6日：同船は長崎発、ウラジボへ：セメント類を搭載。

11月18日午後：同船ウラジボより長崎へ。

11月19日：同船、長崎発、上海へ。

1903年（明治36年）

ロシア義勇艦カザンは日露情勢緊迫化により最後の長崎寄港、計12回訪問
以下は長崎の新聞によるカザンの出入港記録である。

4月17日：カザンは大連より長崎入港。

4月18日：同船は長崎発、ウラジボへ（以下カザン日程は下記の義勇資料とほぼ一致）。

5月1日：同船、ウラジボより長崎へ。

5月3日午後5時：同船長崎発、オデッサへ。

（参考）義勇汽船2隻、武装してウラジボより、函館に寄港。

9月8日午前11時：カザンはシンガポールより長崎入港。

9月9日：同船は長崎発、ウラジボへ。高島炭5百トン、西瓜71(単位不明)積む。荷受け人はM. GINSBURG & CO。

10月5日：カザンは大連より長崎入港。

10月7日午後7時：同船は長崎発、ウンスン経由上海へ。

筆者が近年オデッサの黒海艦隊博物館でみた義勇艦隊資料に「カザン」の1903年だけの航海記録があった。原文はロシア語、コピー不能のためビデオカメラで撮影した画面から判読。以下、義勇資料と記す：日付は露歴で、太陽歴に換算するには13日を加算する必要がある。

1月上旬、オデッサ在泊：23日黒海のノブシスクへ、28日オデッサ帰航。

2月13日オデッサ発、14日コンスタンチノーブル（着を略す）発、17日ポートサイド、18日スエズ、19日発

3月4日コロombo、5日同地発、11日シンガポール、22日旅順（オデッサから37日目）、27日大連。

4月2日大連発、5日（太陽歴18日）長崎発、16日ウラジボ発、20日長崎発、30日シンガポール。

5月6日コロombo、20日スエズ、21日ポートサイド着発、23日ウナデ発、24日カバキ発、25日オデッサ
（注：長崎からオデッサまで所要航海日数35日間）。

6月19日オデッサ発、26日セバストポール発、同日オデッサ。

7月23日オデッサ発、24日コンスタンチノーブル発、27日ポートサイド発、28日スエズ発。

8月11日コロombo発、18日シンガポール発、27日（太陽歴9月9日）長崎発（オデッサから35日目）。

9月9日ウラジボ発、19日旅順発、同日大連、21日大連発、23日長崎（太陽歴10月6日）、24日長崎発、26日
Bycxharb経由で上海、30日上海在泊。

10月1日上海発、同日Bellboy、2日Bellboy発、3日オーストラフ（松）、3日松発、同日フーチョイ（パゴダ
湾）、5日フーチョイ発、11日シンガポール発、18日コロombo、30日スエズ、同日スエズ発、31日ポートサイド、
11月2日バシカ湾、3日バシカ湾発、同日Yahab発、4日コンスタンチノーブル発、5日オデッサ。

（長崎からオデッサまで46日間）。

12月10日オデッサ発、11日セバストポール発、13日コンスタンチノーブル発、16日ポートサイド、17日スエズ、
22日ペリウム発、31日コロombo発

● 義勇資料は露歴1903年12月31日{太陽歴1月13日}で切れている。上記の記録から見てカザンは通常17—
18日間でコロombo旅順ないし長崎を航海している。太陽歴2月1日（日露戦争の1週間前）すぎに旅順に
到着したであろう。

露歴4月20日（太陽歴5月3日）、ロシア海軍軍令部の作戦計画第2号の区分でカザンはウラジボの巡洋艦支
隊に付属し給炭船である。

（参考）ウイッテ蔵相は「義勇艦は大連を終点としウラジボを外せ」と指令。

総括：明治36年10月7日がロシア船としてカザンの最後の日本訪問。これまでカザンは冬季は極東に来てい
なかったが、この後、カザンはいったんオデッサに戻り、12月中旬に極東に向かった。ホーソンレスリー社
のH.ローエルによると1904年1月1日現在カザンの総航海距離は133,586海里（これは極東片道（1万海

里)×13回+英国～オデッサ間の航海距離に近似)。

1904年(明治37年) カザン、日露戦争で損傷

1月1日ー21日：カザンはスエズ運河を通過し、インド洋を極東に向け航海中。

(参考) このころ日本海軍の新装甲巡洋艦「春日」・「日進」はイタリア発日本へ回航中、ロシア戦艦オスラビアほか巡洋艦3隻、義勇汽船スモレンスク、サラトフ、アリヨールがこれに接近し緊張する場面もある。

露歴1月21日：(太陽歴2月3日)カザンは旅順に入港。東港に繋泊積荷、新兵の揚陸に従事。

{明治38年460軍艦浅間笠置千歳行動報告：付病院船の件(令日露M37-499)以下@と略記する。なお、@の月日は日本海軍が露歴から太陽歴に換算した日とみられる。

旅順のアレキセーエフ極東太守はまだ日露戦争は始まらなと樂觀、港内に碇泊していたカザンに翌日出港してウラジボへゆくよう許可し「途中、見張りを嚴重にせよ」と簡単に訓辞した。この夜、日本艦隊の夜襲があり、カザンは旅順に封じ込められる(極秘本・日露海戦史第1部第1巻p.351)。

(参考) 1月23日付け海商通報「義勇艦隊は長崎での石炭・糧食の積載を上海に変更」

1月27日付け海商通報「義勇艦隊は結氷期間中ウラジボへの通行困難となり、2カ月間長崎寄港を中止する」これは表面上の理由であるとして、まもなくウラジボの氷はそれほどでもないという否定記事がでる。

1月29日までカザンは東港に碇泊@。

1月30日：西港に錨地変更@

2月5日現在の日本海軍の「艦船動静表」によると「カザンは1月30日香港出港、旅順に向かう」(当時は諜報といえども情報伝達が遅い)。

2月7日：(日露敵対行動始まる：「ムクデン号」の拿捕)。2月7日午前7時45分。「龍田」は「ロシア号」を捕獲。同日第2艦隊「吾妻」がロシア商船「アルグン号」を拿捕。また義勇艦「エカテリノスラブ号」を2月18日釜山沖で拿捕。

2月8日夜(日本時間9日0時28分)日本駆逐隊は港外のロシア艦隊を襲撃。

2月9日午前9時45分巡洋艦「高砂」が「マンチュリア号」を捕獲。

2月9日午前11時55分ー午後1時：日本艦隊、港外のロシア太平洋艦隊を砲撃。

同日：(露歴1月26日)露国軍令部編『露日海戦史』によると東港陸岸に係留中のカザンの第1船倉に12インチ砲弾の命中1発。港務部の消火班により鎮火とある。「三笠」の日誌では1時間5分の戦闘で「三笠」は距離8000メートルで12インチ主砲をたった7発発射。測距儀を用い慎重に発射とある。また2月14日まで旅順に滞在した日野氏の話では「日本の弾丸はドックと支那人街に落下し、彼ら職工の多く逃げ去りて損傷艦の排水修理が困難である」という。旅順市内に砲弾が落下し、カザンも被害を受けた可能性はある。

2月10日：カザンは赤十字旗を掲揚する@

2月14日午前5時、風雪を冒し第4駆逐隊「速鳥」「朝霧」の旅順港襲撃(佐世保海軍勲功会編『日露海戦史』)朝霧が12斤砲でカザンを砲撃とある。おそらく誤記。

『露日海戦史第1下巻』p.88：は2月18日ロシア戦艦レトビザンが探照灯で降雪をすかし「朝霧」に発砲を記録。カザンについては記述なし。

(参考) 2月24日第1次旅順口閉塞「報国丸」が参加。その指揮官広瀬武夫少佐、栗田富太郎大機関士(=本来は「敷島」乗組)

(参考) 2月25日第3次攻撃：戦艦、巡洋艦、駆逐艦参加し「ウヌシーテリヌイ」を撃砕。日本駆逐艦は偽装帆を張って「レトビザン」を襲撃。

2月26日：正午：モンゴリアの右舷に弾丸落下し、負傷者発生、カザンに送る@。

3月10日午前10時08分—0時30分、第4次攻撃：第1戦隊第2小隊「初瀬」「敷島」「八島」が間接射撃。なお、3月8日の日本戦艦の間接射撃は艦体を傾斜させ12000—12500メートルで実施。

午後0時52分—1時46分第1小隊「三笠」「朝日」「富士」の間接射撃：老鉄山燈台北48°半西、老鉄山東角北67°1/2東北方。海浜から6海里半に静止して12900メートルの距離から12インチ砲発射。以後移動し射撃継続。発射弾数は「三笠」で21発。観測に当たった装甲巡洋艦「常盤」の「弾着よし」、巡洋艦「千歳」の「港内に火災」などの通信が記録されている。（ロシア軍令部記録ではカザンに損害、日本海軍軍令部編公刊戦史でもセメーノフの記事にある「カザンの舷側で破裂」を引用）。しかし、3月16—17日時事新報特派員発「3月12日旅順出港のノルウエー船フォックストン号の船員によるとカザンは旅順港内にある（間接射撃による他のロシア艦船の被害は詳しいがカザンの被害は言及されていない）」

3月20日（露歴3月7日）：「汽船モンゴリアを病院船とする」@

3月22日午前10時29分から第1戦隊「富士」「八島」の間接射撃（英国海軍編の戦史では12インチ砲弾がカザンの舷側を貫通したが不発とある）日本側戦史（極秘本）では旅順兵営で戦死6人重傷8人をだし、旧市内に損害を与えたとのみ。

露日海戦史は「露歴3月9日（太陽暦3月22日）日本巡洋艦の砲撃でカザンが損傷」とある。デニス・ウオーナー/ペギー・ウオーナー著「日露戦争全史」では「八島・富士の弾は命中せず」当然、カザンの被害は記録無し。

（参考）3月27日第2次旅順港口閉塞で、福井丸の広瀬武夫少佐戦死（のち中佐）栗田大機関士負傷。栗田は負傷回復後、カザンあらため笠戸丸の日本回航時の機関部員となる

（参考）4月13日、ロシア戦艦「ペトロパウロフスク」は敷設機雷で轟沈。司令長官マカロフ中将戦死。

4月15日：午前9時55分新鋭装甲巡洋艦「日進」「春日」の間接射撃。

（参考）4月20日：日本兵負傷者3人をモンゴリアに収容@

（参考）5月3日第3次旅順口閉塞：（佐倉丸の白石葭江指揮官はじめ戦死者多数でる）

（参考）5月15日「初瀬」「八島」触雷し沈没。12日以降日本の戦没艦艇多し

5月31日：カザン日誌：この日から患者数（兵士16人、職工22人）及び経過を記す@。

（参考）6月15日：常陸丸・佐渡丸事件

（露歴7月18日＝太陽暦で8月1日）カザンは臨時太平洋艦隊司令長官心得の命令で軍用病院船となる@。

8月3日：カザンは商業棧橋に碇繋（患者数111人）

8月5日：カザンは商港に碇泊@。

8月6日：カザンは商業棧橋に繋留（砲声絶え間なし。このころより攻囲軍砲弾飛びきたりしものの如し）@。

8月10日：黄海海戦起こる。まずロシア汽船ノーウィック号、インコウ号が旅順の港口を掃海してロシア太平洋艦隊のウラジボ向け脱出を支援した。ロシア艦隊の出港作業は緩慢で3時間半かかり、日本艦隊に戦闘準備の余裕を与える。汽船ボガール号は錨付き空水雷を投じて航路を示した。しかし、連絡が悪く後続諸艦はこれを本物の水雷と誤認し隊列が混乱した。太平洋艦隊後尾には病院船モンゴリア号が随伴した。しかし、カザン（速力10ノット・最強13ノット）は残留した。この海戦でロシア艦隊の敗北に終わり、ウイトゲフト司令長官は戦死、旗艦ツエザレウィッチ号は中国に抑留され、その他の諸艦はウラジボ行きを断念し、旅順に戻り、以後逼塞してしまう。この海戦でのロシア負傷兵はモンゴリアに収容された。駆逐艦「朝霧」はロシア駆逐艦のレシテリヌイを清国チーフで捕獲・当時清国は中立国だが日露戦争はその領土で起きた。

8月22日：カザンは内港の浮標に繋留@。

8月31日：カザンは患者下士卒177人、職工36人その他3人を収容中@。

（参考）日本軍は、バルチック艦隊が東洋に回航される前に、旅順港内のロシア艦隊を撃滅する必要があった。そのためには旅順の陸上要塞を占領しなければならない。8月、陸上の戦いが激しくなるにつれ、ロシア艦隊から大量の艦砲と水兵が陸戦に引き抜かれた。

9月3日：カザンを攻撃したといわれる「速鳥」（艦長松永少佐）が触雷沈没（その次没状況不明とある。＝

佐世保「勲功記」)

9月5日：カザンは商業棧橋に繋留@。

9月6日：カザンは内港に碇泊@。

9月11日：カザンは商業棧橋に繋留@。

9月12日：内港に碇泊@。

9月14日：カザンは商業棧橋に繋留@。

9月15日：カザンは内港に碇泊@。

9月17日：カザンは商業棧橋に繋留@。

9月18日：カザンは西港に碇泊@。

(参考) 9月18日—10月9日 (太陽暦) ロシア艦隊による日本陸軍陣地への間接射撃。

10月末：ロシア艦隊が陸上に派遣した兵員は1,600人、カザンとアンガラから兵員計240人が虎尾半島の魚雷営や老鉄山、中央障壁の砲台など第1線へ投入された。給与は陸軍から支給されたが馬肉ですら高価で、野菜は皆無、靴はすり切れて、布きれを足に巻いて気温氷点下の陸戦陣地で戦闘した。

(参考) 日本海軍も8月に黒木悌次郎中佐が指揮する陸戦重砲隊を編成し、口径6インチ(15センチ)以下の大砲43門でロシアの陣地や艦船を精密砲撃した。これは地図に升目を書き、一つ一つの升目の中に砲弾を打ち込んでいくやり方で戦略爆撃の方法に類似。

(参考) 9月20日、日本陸軍は海鼠山占領、西港の艦船を狙い撃ち。10月28日のザビヤークなど沈没艦船がでる。義勇汽船アンガラ号は当初、武装して仮装巡洋艦であったが5月に武装を解除し、船体を白色に塗って赤十字を表示し、海軍用病院船に変更した。アンガラは海鼠山から見えるところ(西港* 公刊p.573)に投錨していた。

9月20日：カザンは商業棧橋に繋留。(砲撃絶エズ。此頃ヨリ最モ激シク市街、港内、東港等モ弾丸落下セルモノノ如シ) @。

同日：カザンの右舷に砲弾落下をモンゴリアの日誌が記録@

9月21日：カザンに日本軍の砲弾が至近距離に落下。モンゴリアは3弾を受け、ボート、甲板、機関室破損@。

9月22日：カザンは西港浮標に碇繋@。

9月25日：カザンは魚雷営前に碇泊@。

9月26日：カザンは西港溝路に碇繋@。

(参考) 9月28日戦艦ポペーダに5インチ砲弾5発が命中、5人の死傷者がでる。ロシア艦隊は海鼠山から見えない白玉山側に移動して一旦砲撃を避ける。日本軍は中国人スパイの協力で港内を徐々に精密射撃する(露日海戦史)。

9月29日：カザンは患者として下士卒その他228人を収容中。本日患者の一部をアンガラ号に移す@。

9月30日：カザンは患者として下士卒118人、職工35人収容中@。

10月1日までに戦艦3隻、アンガラに被害がでる。10月2日には28センチ榴弾砲も加わりロシア各艦に損傷が続出する。

10月16日：カザンは患者として下士卒177人。職工その他44人収容中@。

10月18日：カザン付近に午前9時半砲弾飛来して爆発。患者227?人を海軍病院に移す。病院に付属する物一切をボートに乗せ海軍病院前に陸揚げせり*。

10月20日：カザン、アンガラの病院船としての業務廃止のため該船の下士卒を臨時海軍病院に編入せしむ*。

(参考) 「10月22日密告者操縦のため必要有りロドセン号、タングス号捕獲せしや・否や電報ありたし。」日本海軍の記録・発信者不明の電報あり。

10月22日：カザン艦長マルレエル大尉は「19日に砲弾が多数落下し、病院船として危険なので病院船をやめ」と旅順の司令官に申請し、衛生兵・看護兵を陸上に移す。カザンは西港に避難していたがアンガラとともに乗員を解散した。これはアンガラのように砲撃を受けることを予想したためである。これらの乗員は兵舎

や中国人家屋に入り、やがて先発隊同様、陸戦隊として激戦地に配置される。軍医も第一線で治療に従事した(露日海戦史第5巻)。

(参考) アンガラは10月30—31日(公刊:28日)砲弾2発を受け、船首が深く沈む。かくして解役。コステンコ少将によるとアンガラは200人の傷病兵を船倉に収容していた。砲弾が船底を貫通し、沈みはじめ、手のない兵、足のない兵が互いに助け合って甲板にはい上がった。病院や病院船の砲撃についてはの交渉の記録が日露の双方にあり。

11月1日:病院船としての救護事業を全廃。義勇艦隊の船員のみ船内監視のため残留させる。(参考)11月25日:「アムール」「ブレイ」両船に集中弾。モンゴリアにも至近弾あり。危険なので作業中止@。

12月6日朝、203高地陥落。観測所を設けて、港内の照準砲撃開始。ロシア艦船は相次いで撃沈または自沈(沈座もある)し、壊滅状態となる。沈座艦船からの盗難を警戒し、武装艇が12月14日以降每晚3回各艦を巡視。

12月14—17日:赤十字病院付属品の収容を着手す。病人を収容し病院に配置せり@(筆者注:この意味不明:再度病院船に仕立てたということか)

12月15日:ロシア抗議「日本軍は病院を砲撃している」日本「大砲が摩耗したソレ弾である。弾丸は思うところに命中しない」と回答。

12月15日:汽船カザン(ママ)にモンゴリアより臨時乗組員16人を送り込む@。

(参考)12月21日:日本大本営に香港領事館経由で発信人不明の電報「12月19日バルチック艦隊は喜望峰沖を通過せり」(発信人は和野清秋と後年判明)翌年4月8日に艦隊はシンガポール沖を通過、からゆきさんたちは日本の前途を心配する。

12月18日モンゴリアより1貴族(原注:アトミル・リーベン氏?)を医務監督キナストに附けてカザンに移す@。

12月21日:日本委員来たり、船内を視察する@。

12月26日日本将校・文官らモンゴリアを視察、証明書類を持ち出す(以上で{病院船の件}の資料終わり:結局、カザンの日誌には命中弾の記録はない)。

12月30日深夜:カザンの鉄製短艇が旅順港口を脱出した。これは軍港司令官の秘密書類を届けにチーフ(煙台)に向かったものである。チーフは旅順南方87海里の山東半島にある港でロシア領事が駐在していた。短艇にはエリセーエフ海軍中佐、ワレリアン・クジミン・カラワーエフ大尉と水兵4人が乗り、真冬の日没後、日本海軍艦艇の封鎖を破って南下する。強風のため2段縮帆で指定地に向かう。31日の黎明、海岸に接近するが東に寄りすぎていたのでホワイトロック島に着け、徒歩でチーフに行き、無事封書を領事に渡す。短艇は後日曳舟でチーフに曳航した。このほか、1月1日夜、同じく脱出のロシア駆逐艦「スターツヌイ」ら数隻によりロシア軍旗や書類が青島へ届けられている。バルチック艦隊の東航に備え、整備のため日本艦隊の旅順港の封鎖は12月23日からやや緩んでいた。

日本が収容時のカザン指揮官はミルレエル大尉。船員92人、救護員62人患者181人。

別表によるとカザン乗組員は下士官1(人)、信号兵3、上等水兵1、一等水兵2、二等水兵9、コック1、一等機関兵7、二等機関兵3、一等火夫3、三等火夫2、計32人である。

1905年(明治38年) カザンを笠戸丸と命名、日本海海戦

(参考)1月1日:旅順のロシア軍は日本軍に降伏

(参考)1月2日:旅順開城の規約調印

(参考)1月5日:水師營で乃木・ステッセル会見

(参考)1月13日:日本軍第三軍は旅順に入城

2月3日午前8時45分グルニー(大連)發電報:発信人:第3艦隊司令司令長官→受信人:部長:(作戦班と諜報班の上の軍令部長)

「カザン」号ニ関スル貴電ヲ了ス柴山長官明日任地ニ至リタル上本船に關スル事情ヲ照査シ要スレバ具申ノ上処分方取計フコトト協議済ナリ。

(参考) 2月4日：旅順に早速鎮守府が設けられた。司令長官に柴山矢八海軍中將、參謀長に(明治34年4月～明治37年6月)英国公使館にいた玉利親賢大佐、港務部長に植村永孚少將、軍医部長に鈴木孝之助軍医總監らが着任した。

2月7日：旅順鎮守府司令長官あて旅順要塞整理委員長伊地知幸介(陸軍)よりカザンの処置について経過説明(陸軍としては病院船を処分する権限がなかった@)

2月21日午後4時15分ダルニー發：谷口參謀：受信者：山下參謀

病院船の処置に就いては不日司令長官より意見具申せらるる由なるもご参考のため小官の聞ける所を内披す。

「アンガラ」号廃棄せられたる事実により、また、「カザン」は11月1日附けにて病院船たるの業務を廢する旨の軍港司令官命令書同船より発見せられたる事実により、共に正当の没収物たること明らかなり。独り「モンゴリア」は赤十字病院船としてその資格に欠くところなく又一も不正行為ありし事実発見せられず。くわうるに有賀博士の言によるに、開城談判の際、彼の委員より赤十字社の財産は没収せざる様申出たるに依り、其財産とは何なりやとの問いに対し陸上の病院及び「モンゴリア」なりとの説明あり。我委員は私有財産の処置を議するは軍司令官の権能以外なるが故にこれを規約の内に含有せしむるあたわざるをもって右の問いに対し没収せずと答弁せし事実あり。開城規約の草案者たる同博士は初めより病院船は没収せざる精神にて起草せしものなりと云う。以上の理由に依り司令長官の意見は「モンゴリア」のみは没収せざるを可とせらるるもののごとし。同船乗員は20名を残し、他は明後日チーフに送らるる予定なり。小官は湾口各棧橋を視察し、25日發、徳山を経て帰京す。(終わり)

(参考)「極秘本」には目次には掲載されている「カザン」引揚げの記録が欠落している。湾内に沈座した他の船舶の記録では、どこにどんな太さのワイヤーをどう張ったかなど図面入りの詳細な技術作業が日を追って記されている。しかし、ほかの公文書(公文備考だったと思う。これも分量が膨大で未見の資料が山のようにある。)でみて、メモをしたのである程度これで補えるだろう。

2月22日：条約違反でカザンは日本海軍戦利品に決定

工事には、道具がいる。まず、3月2日：ロシアが開城に当たって沈めた「浮きクレーン」をまず引き揚げた。海軍としては、まず注目する船は戦艦である。3月17日には戦艦「レトビザン」を初め、戦艦の重量附属物を陸上にあげ、艦体自体を軽くして、引揚げ作業の下ごしらえをした。

3月30日：海軍次官より旅順司令長官へ「アンガラを仮装巡洋艦に使用する計画あり。(バルチック艦隊の接近で哨戒用に多数の仮装巡洋艦が必要だったのであろう)引き揚げの見込みを立てよ」旅順司令長官より大臣へ「陸軍より通報なく調査に着手するは穩当ならず」

4月1日：「明治37-38戦時書類」巻18電報5-5「カザン佐世保に回航の件」「カザン・アンガラ2隻の件」(官291明38-4-1)

4月1日：海軍次官より旅順司令長官へ「差支えなし」：同日海軍次官より陸軍次官にアンガラ・カザンの処分に着手すると通知。

4月2日：すこし行き来があつて軍務局長から旅順參謀長へ処分着手差し支えなし。

4月3日：高速商船「アンガラ」、4月17日に巡洋艦「パルラダ」の船底を潜水夫が検査する。5月に入り、「アンガラ」の船底の大掃除がはじまった。艦内に溜った大量の土砂を取除くのである。床上浸水した家屋と同じことだが、もともと狭い艦内で機械や荷物が詰まった船底の掃除は容易ではない。大量の清国人がこの労働に従事する。

4月6日：「明治37-38戦時書類」巻23(9)「カザン、アンガラ処分に関する件」(極秘本第7部：巻の14)

4月16日：海軍大臣より旅順司令長官へ「アンガラ」引上げ実施すべし。作業期間の計画・費用を報告せよ」同日：旅順より回答「『アンガラ』は舷側に2個の弾痕あるのみ。損害大ならず。引揚げ容易と認む」(極秘本第7部：巻の14)

5月4日：英国篤志看護婦：リチャードソンが病院船を遠望。日本士官から「カザンは立派に役立つ」と聞かされる。

5月9日：大軍医：前田三郎が「カザン」回送の命令を受ける。

5月12日「旅順港139号の10」{汽船「カザン」は当分その部で保管すべし}

「海軍軍令部公式戦史」(第2章「鎮守府の開庁」38ページ)によると旅順軍港司令長官は植村港務部長に命じ、これを保管させ、「カザン」は戦利品、病院船「モンゴリア」は解放と決めた。そこで鎮守府参謀中島市太郎中佐と横田平作少佐は、大主計佐野和一郎以下準士官、下士卒56人、通訳2人を伴い「カザン」を戦利品として収容した。「カザン」にゆき船長に面会：かつて陸軍衛生部員が借用した書類のほかに書類がないか聞く。会計簿など提出させる。(筆者注：カザンの航海日誌は陸軍が持って行ったのか?)カザンの乗組員をすべて上甲板に集合させよ、その際、日本の水兵に警戒させると船長に告げる。船長から集合した総員に「本船は戦利品になった。各自の私物の携行は差し支えなし」と通達させる。中島中佐は「看護師を無条件で解放し、船長及び普通船員は宣誓のうえ解放し他は捕虜とする」と告げる。その結果、下記4名{(普通船員)2等補助手、先任火夫、食堂給仕、機関長(ノルウェー人)}は宣誓した。昼食後、ロシア人を下船させ海兵団に収容した。船長は熟慮の末、下士卒と共に捕虜になると決め、この35人を陸軍に引き渡した。この日(5月12日)日本の機関部員がエンジンルームを点検し、すべて完全で副缶に点火し、発電機を廻したところ異常なしという。ただ、左舷の機関のディスコネクティング・ギアの取手ががっちり固着しているが、これもすぐに動かせる見込み。

(考察-1)最後に宣誓をしないで捕虜になった船長は義勇艦時代からの船長スメルスキーではないか?スメルスキーであることを確認するには松山などの捕虜収容所の名簿を見る必要があろう。なお旅順包囲戦の期間中、カザンは中佐が指揮官だった。これが病院船である条件を欠く一つの理由とする資料もある。

(考察-2)ロシア側はこの船が病院船であることをスイスの赤十字国際本部に通告していなかったらしい。しかし、封鎖中の旅順でどのような国際通信の方法があったろう。有線電信(海底電線)は旅順とチーフ(煙台)間にあった。開戦前に切断されていたし、当時の無線電信は約100キロ先のチーフに明確には伝わらない。

「巻23(6)明治38-2-28」モンゴリア・カザン・アンガラ処分議につき意見具申(947号)

(参考)3月11日：加賀丸で二等軍医(中尉相当)加藤健之助、大連発帰国・14日関門海峡通過し花火で出迎え。

(参考)3月24日香港にバルチック艦隊の病院船カストロマ入港、外波内蔵吉(トバ・クラキチ)中佐から観察報告あり。外波は当時日本海軍の無線電信の専門家なのでカストロマのアンテナを図入りで報告。

5月12日：旅順で「カザン」を引き揚げることに決定、日本国籍取得。

(参考)5月13日：ソブラレシス号が触雷し沈没する。中国人船員に犠牲者がでた。港内外はまだまだ爆発物がうようよして危険きわまりなかった。

5月20日：「カザン」は引出し準備着手。掃除・消毒を終わり、慎重に航路浮標を設置して、安全に港からでられるように手配をする。

5月22日：「カザン」の引出し準備着手。しかし26日昨夜来の激しい雨風で係留したロープが何本か切れ、強風の中の繋ぎ直しに午後までかかってしまう。満潮のタイミングを逃してしまい、作業中止、全員この作業で破れた衣服を修繕する。

5月24日：カザン乗り組み予定の前田大軍医(軍医大尉相当)らは「遼東丸」に乗って佐世保発：

5月27日：前田大軍医乗船の遼東丸大連(ロシア占領中はグルニー)着。

(参考)5月27-28日：日本海海戦が対馬沖で戦われる。(信濃丸、アリヨール、亜米利加丸、香港丸、台中丸、ウラルなど日露両国の仮装巡洋艦が参加。)

5月28日：前田大軍医は同日陸路旅順に入る。カザン回航乗組はつぎのようである。

橋本又五郎海軍中佐：堀江鶴彦大尉：堀江豊彦中尉：山崎達之助機関少監：栗田富太郎(旅順港閉塞作戦で

負傷)大機関士：岡崎建吉大機関士：佐野和一郎大主計。前田大軍医：準士官7人：船匠師1：下士卒160人(内「アンガラ」に12人転乗)前田は病院船であったため(汚染されていると考え)消毒の準備をしたが、すでに済んでいた。準士官以上は高級船員船室に入る。下士官以下は前部の船員用船室と下甲板の第1区に入る。換気と採光は良好だが床虫多くノミで苦しむ。医薬品は旅順港の衛生部から治療品一箱もらい、呉に帰って清算する。

5月28—31日：この間、前田大軍医らは旅順港主計部から弁当をもらった。

6月3日：笠戸丸と命名、信号符字(カザン=LBJR)を(笠戸丸=GQSL)に達。本籍は呉鎮守府。

同日：アンガラは姉川丸と命名{海軍制度沿革史}。

6月4日：病院船弘済丸事務長・細川源太郎の手記「はじめカザンはロシア軍の衛生材料を積んできて旅順着後は病院船になるはずだった……というのがその形跡は疑わしい。交渉がはかどらない間に衛生材料は半数が紛失。浅瀬に乗り上げていたのを苦もなく引き下ろした。カザンと音が通じるので笠戸丸と命名した。アンガラは捕獲は問題ない。モンゴリアは赤十字条約無違反で解放に決定。」以下、アンガラ、戦艦ポピエダ(艦内は広々としてお寺の本堂のようだ…)の損傷状況、日本の閉塞船の描写詳しい。

6月10日：「法学志林」第7巻6号に法学博士秋山雅之介「露国商船の拿捕免除に関する勅令を論ず」(内容：は勅令20号について説明。ロシア商船は開戦後、37年2月16日まで日本の港で荷を揚げ・積みして去ることができる。商船とは軍艦と官船以外の船)

6月8日午後1時曇り：笠戸丸は旅順発。午後9時10分大連着、軍需品を搭載(栗田富太郎「第1回第2回閉塞秘話」水交会、昭和8年)以下航海記は栗田と前田による。

6月11日：午前6時、笠戸丸は大連湾発：指揮官橋本又五郎中佐、機関長山崎達之助機関少監(少佐に相当。)栗田富太郎大機関士と前田大軍医によると濃霧のため回送に日時を喰い佐世保までで生鮮食料品は欠乏気味。水は旅順と佐世保で十分に補給できた。約800哩を26日かかって回航した。

6月12日：半晴午前10時、笠戸丸は長山列島発。濃霧のため外長山列島で仮泊。

6月14日：笠戸丸は航海中。

6月15日午後8時40分笠戸丸は佐世保港外に仮泊。

6月16日晴れ：笠戸丸は午前7時移動開始。午前8時40分佐世保港着投錨。

6月18日：曇り午前8時笠戸丸は佐世保発。同日午後4時35分：天草牛深港着。

6月19日曇り午前10時30分：牛深港発。

6月20日雨：午後7時30分笠戸丸は和佐湾へ(山口県大島郡屋代島：防予諸島)。

6月21日晴れ午前5時笠戸丸は和佐湾発。同日午前10時に呉軍港着。

6月22日：笠戸丸の回航要員は呉で引継ぎ。

6月23日：笠戸丸回航要員は解散する(この間1日平均3人の患者あり)。

「笠戸丸」の当時の回航要員による所見は長さ400(feet)、幅50、最大喫水27、排水量9750トン、速力13.4ノット、2本マスト、1本煙突、シェルターデッキ、スパーデッキ、メインデッキの3層あり、下甲板に200人分のベッドと病室がある美しい運送船である。始めロシア海軍の病院船だったが、のち赤十字の所轄となった。中下甲板は規則正しくベッドを配列し、自在なる2重床が鉄の柱で両甲板に保持され、前後密着、左右は数個連続し、員数を限って分割できる(小部屋に分けられる)。貨物倉として使用す時はベッドは除去できる。シェルターデッキには客室、固有船員室、後部に特別の薬室を備え、中甲板は病室との交通は便利である。前後部に便所、物置、洗面器を備え、賄い(調理場)は客室と隣接している。この甲板は木材を多用。大ハッチは中下甲板に通じている。スパーデッキは前後を固有船員の区画とし、全部自由に開通し、病室と相通じている。両舷には2ヶ所の洗面所：12個の洗面器あり。この甲板は鉄製で快適とは言えない。採光と換気は大ハッチと舷窓からであり、通風器はない。ただし固有船員室と病室は通風器、昇降口から風がくる。病室には小さなスカイライト(天窗)あり、換気と採光は極めて良好。酒保は固有船員室に接して両舷にあ

る。便所・浴室は病室以外ない。下甲板（メインデッキ）は中央機関室で前後に分割され、前方に偏して中隔壁あり。中甲板のように直接行き来できない。この甲板は木で覆われている。採光・換気は中甲板より劣る。ハッチは階段を付けて中甲板経由で上甲板にでる。中甲板との間、前後両室に各2個の階段があり、暖房・電灯は完備している。病院としては何もない。機関室両舷の前後にきわめて粗末な木板で区画し、ベッドをどけて手術室とした部分がある。最上甲板に蒸気消毒器を設けたり、上甲板のハッチをスカイライトに改造したあとがみられる。この記録以外に笠戸丸についてこのような具体的な描写はあまりない。設計図と比べてもなかなか細かく見分したことが分かる。

（参考）「①艦船行動33-4-4」明治38年8-10月艦船行動簿は外国船の動きに、カザンは全く記録がない。

（参考）「今日露M37-512戦利艦艇」には姉川丸、満州丸、韓崎はあるが笠戸丸なし。各艦とも船底に泥が堆積して掃除が大変とある。

7月8日：軍務局長より呉参謀長へ「笠戸丸は工作船として至極適当」（「特設艦船履歴簿その3」）「同その2」は戦史室図書館になし。

7月14日：石炭運搬船としてはどうか。

7月23日：笠戸丸は運兵船適当。呉発「陸軍の石炭船に適するものと交換する」。

7月26日：宇品碇泊司令部より「陸軍は笠戸丸を調査したい」。

7月26日：海軍省が侍従武官に提出した戦利品の表に笠戸丸見あたらず。

7月28日：軍令部員より呉へ質問「修理の期間は？」、呉回答「およそ2週間なり」。

8月1日：呉発：「笠戸丸は近く航海・石炭船と交換使用可能」。

8月2日：（海軍汽船）笠戸丸は陸軍運送船満州丸*と交換使用。

*この満州丸は原名マンチュリア号の満州丸（戦時に仮装巡洋艦として使用）とは異なるようである。

（考察-3）戦利品の種類と値段：笠戸丸の価格は40万円：装備品は1400円

海軍制度沿革史」艦船総説：製造及び実施：p.11によると

	艦船種	総トン	見積価格	処分
カザン→笠戸丸	汽船	6,096t	¥400,000	貸下 海軍で使用
アンガラ→軍艦姉川	汽船	11,700t	¥957,829	
ちなみに ポルタワ→軍艦丹後	戦艦	排水量 10,960t	¥10,180,000	海軍で使用

船齢や状態で単純に比較できないが、同じ汽船でも速力の速いアンガラはカザンの2倍に見積られている。戦艦の見積価格はアンガラの10倍、カザン20隻分強である。「カザン」の新造時は百万円だったとすると5年で4割に下がった。

（極秘本）の「戦利品、捕獲品」の章に次の事項あり

「笠戸丸」水路関係の捕獲品（見積価格5.000で5円とあるが以下円以下を省略）

個数は明記しない限り1個。

チャート・コース・インジケーター（5）、半円分度儀（同）、星球儀（20）、自記晴雨計（25）、自記寒暖計（同）、バロサイクロメーター（10）、1週間巻時計6個、6分儀2個、水銀盤1、平行定規1、デバイダー3個、修正式羅針儀1、通常羅針儀2、ボート羅針儀2個、測深儀1個、測距儀1個、計1,441円相当でこれ

は呉の軍港で兵備品に元請けすると8月6日、有馬呉軍港司令長官から届があり、海軍大臣の承認を得ている。

国有財産となるといろいろな手続きが必要で、海軍も多くのペーパーワークを必要とした。ちなみに当時の銀行員の初任給は大学卒で35円、警官12円、ホテルが1泊6円であった。

8月6日：笠戸丸はタータン・チューブ、ブッシュ入れ替え。船底塗装中。

8月13日：宇品へ回航の運転請負人（三井物産）上船。

8月14日：船体・機関とも工事完成。

8月14日：山本権兵衛海軍大臣「汽船笠戸丸を当分の間陸軍で使用に供しその間、陸軍運送船満州丸を呉鎮諸管として使用せしむ「内458」

8月16日：三井物産合名会社へ運転委託決裁（1トンにつき2円69銭＝16,344.44円／月）「官3078」（戦時書類210）笠戸丸の評価価格は40万円（原案の77万9千円を訂正してある）

「明治37-38戦時書類」巻218/巻210「笠戸丸運転契約官3078・艦政本部主務（1）」「笠戸丸維持に関する件（3）」

9月21日：船体図・要目表を呉鎮守府から軍令部に送る。

12月（東洋汽船は南米西海岸航路開設）

12月9日：昨日（12月8日）笠戸丸大連発宇品へ12日到着の予定。第4師団後備工兵第1中隊、近衛師団衛生予備廠、第2師団第4-5-6補助輸送隊を搭載。

{大本営日露戦役M38-20に日記風に記載、M38-21に輸送計画表あり}

12月21日：経理局長より三井物産へ「汽船は本日限り契約解除」。

12月22日：「運転請負人は25日限り解約」経理局長より三井物産へ。
交換使用中の満州丸を陸軍から返還してもらう。

12月23日：以降、運転契約は陸軍が行う「経建機密964」。

12月27日：笠戸丸は柳樹屯発兵庫へ12月30日到着予定、後備歩兵第36連隊（2中隊欠）を搭載。

1906年（明治39年） 「笠戸丸」は陸軍の兵員運送船となる

1月8日：笠戸丸は大連発、宇品へ1月11日到着予定。

歩兵第18連隊（第1大隊および2中隊欠）を搭載。

1月21日：笠戸丸は大連発、宇品へ1月25日到着予定。

歩兵第35連隊（本部及び第3大隊）、第9師団第2糧食縦列の1小隊を搭載。

2月5日：笠戸丸は大連発、宇品へ（第1師団15-16補助輸卒隊、後備工兵第1中隊、兵站弾薬縦列、第1輜重監視隊、衛生予備員、患者輸送部、第4師団第15補助輸卒隊、第7師団野戦兵器廠、同患者輸送部、第8師団第1-4兵站司令部を搭載。

2月18日：笠戸丸は大連発、宇品へ2月22日到着予定。

野戦砲兵第13連隊第3中隊、第4軍兵站監部、第10師団第4補助輸卒隊。

2月23日：陸軍省加藤八太郎に宛「交換使用中の満州丸（民間船で陸軍使用）を返す」。

3月4日：笠戸丸は大連発、宇品へ。

臨時鉄道大隊、第2師団第11補助輸卒隊、第3師団第24補助輸卒隊、第9師団第10補助輸卒隊を搭載。

3月23日：笠戸丸は大連発、門司へ3月27日到着予定（この資料の最後）。

歩兵第61連隊、旅順要塞司令部の一部帰還兵、第31旅団司令部を搭載

□オデッサでみた黒海艦隊博物館の写真では「カザンは1906年4月7日（露歴）セイロン沖で沈没」とある。

このカザン号は「カザンII世」なのか、調査を要する。

6月16日：「戦利汽船の処分方」軍令部次長より次官へ。

6月22日：「陸軍より返還あるはず受領保管せよ」軍務局長より呉鎮守府参謀長へ。

6月22日：「笠戸丸を25日に返戻し、軍輸送本部長をして呉鎮守府へ引き渡ししめたし」陸軍大臣より（海軍）大臣へ。

6月25日：「了承」海軍大臣から陸軍大臣へ。

6月25日：「笠戸丸明25日（ママ）受け取り」呉鎮守府長官より海軍大臣へ。

6月27日：陸軍より海軍に返還：呉鎮守府で受領。（内令206）

6月29日：上記につき回答。

7月17日：海軍大臣齊藤実は笠戸丸・楠保丸維持のため東洋汽船株式会社社長浅野総一郎へ使用せしめ方決
済：・8ヶ条の命令書起草。理由は（海官房第2764号）に明記：

◎東洋汽船は「笠戸丸1ヶ月4,253円20銭／楠保丸507円40銭を海軍に支払う」

◎日本郵船は「笠戸丸1年間1万円を海軍に支払うが、楠保丸は海軍から維持料を支出せよ」

◎大阪商船は「両船とも自社航路にトン数過大で不適當」

結局、東洋汽船（東京市日本橋区北新堀町18）に決定。

7月18日：呉鎮守府司令長官あて海軍大臣より「笠戸丸を東洋汽船会社へ引き渡すこと」を訓令。

7月21日付け「東洋日の出新聞」東洋汽船では南米航路を6回定期に拡大。このため平時保管を命じられた
笠戸丸を使用する。

7月22日：呉鎮守府司令長官山内万寿治より「笠戸丸は本日引き渡し候」と届け（呉鎮155-3）。

8月3日：海軍大臣訓令：呉鎮守府司令長官あて「国籍証書手続きせよ」。

8月8日：糸崎海務署の証明「3層鋼製、綱具の形式スクーナー、英字表記Kasadomaru」。

8月11日：三井物産は海軍省経理局長あてに「6月25-17日船員を全部下船させ、海軍へ引き渡したことの証
明願を提出（8月21日付けで海軍省経理局長が証明下付）。

8月13日：糸崎海務署から「笠戸丸」は信号符字LBJRを受ける。

8月26日：笠戸丸はハワイ向け移民646人を乗せ神戸発（この年のハワイ在住移民は6万2千人：日本への送
金額は6,92万円で2位（ハワイの駐日公使に汚職の疑惑）

8月30日：笠戸丸は横浜発。

9月1日付け「海商通報」（笠戸丸は）バルパライソまで航路を延長の予定であったが、大地震のため海陸と
も商業中止。にわかに同港への寄港をみあわせる。幸いに太平洋郵船とフランス船アミラル・デュ
プレーとの競争の結果、（笠戸丸は）ハワイへ寄港する事になり、貨物はもちろん神戸から移民658
人、横浜から100人を乗せてゆくことになり、一昨日（8月30日）午、横浜を出港せり。
（参考）楠保丸は長崎で修理中、10月中旬、笠戸丸の次の便として横浜出立の予定。

12月13日付け「海商通報」：笠戸丸は横浜に碇泊中。

12月25日付け「海商通報」笠戸丸は香港にあり。すでに1回航海済み。

12月31日神戸発の広告「笠戸丸は6000トン設備完全、待遇親切、1月4日横浜発でカリヤオ。イキケ行き。
東洋汽船は横浜市海岸通り5丁目20番地」

（以下、続く）